



## モンゴルの「21世紀行動計画」

モンゴル国を訪ねはじめてから、足かけ8年になる。直接のきっかけは学会分科会で紹介された日モ国際プロジェクトに参加するチャンスを得たことであった。その際私が積極的に応じたのは、心の底にモンゴルへの憧れ　これは日本の多くの友人たちと共有するものだが　があったからではないかと思っている。モンゴルといえば、すぐに頭脳に浮かぶ名前がある。今西錦司、江上波夫、そして、司馬遼太郎である。「遊牧論」(1946)、「騎馬民族国家　日本古代史へのアプローチ」(1967)、そして、「草原の記」(1991～1992)。これら3つの作品は貴いプレゼントのように今でも頭のなかで光り輝いているのである。

今西錦司の棲み分け論は賀茂川のほとりからモンゴル草原へと拡がっている。起伏ある草原に羊・ヤギ・ウシ・馬・ラクダの5畜がそれぞれの牧草をもとめて棲み分ける様子を観察した。江上波夫は壮大なロマンのうえに、遊牧民の個人家族、共同体、軍の組織、国家構成という一連の社会構造について、遙かな歴史と広大な地帯・地理的環境に目を開かせてくれる。司馬遼太郎は、香しい草原地域に住む、心暖かい、故郷を深く愛する一人の女性、ツエベクマさんの実話を物語り、私の心を揺さぶった。

氏も育ちも異なる農耕社会と遊牧社会、日本農耕社会とモンゴル遊牧社会、スペイン・南イタリア・ニュージーランドその他の農耕畜産社会と草原遊牧社会、などなど、比較研究の対象設定が渦をまく想いである。それだけではない。20世紀によって遺された課題　自然環境のシステムと人間の社会システムとの崩壊傾向、共存の復活・持続発展モデルの発見・創出　を地域を歩いて国際比較研究を進めて検証するという大テーマが私たちの前に立ちはだかっているのである。

持続的社會発展を目標におく私たちの研究グループでは「そろそろ今西錦司を超えましょうよ」というフレーズが合い言葉のひとつである。これは、伝統

的遊牧文化を継承しながらグローバル化時代の新しい発展ビジョン・施策を比較研究の視座に据えて現実の動向のなかに検出し、理論モデルと多様な選択肢とを確証していこうという期待にほかならない。

モンゴルは自然環境問題に敏感な国である。国際機関への対応も速い。1992年地球サミット宣言・計画(「アジェンダ21」)にいちはやく賛同し、'97年には途上国では最初の「Human Development Report」(「人間開発報告」)が刊行された。96年には「アジェンダ21」に基づいてモンゴル国独自の21世紀ビジョン検討委員会が発足し、全国レベルの「MAP 21」(The Mongolian Action Program for the 21<sup>st</sup> Century, MAP 21)が'98年に、アイマク(県)レベルの同計画が'99年に刊行され、2000年にはソム(郡)レベルで作成がすすめられている。

「MAP 21」の構想には4つの柱がある。第1,社会発展、第2,経済発展、第3,自然資源の利用と自然環境の保全、第4,実施の方法・推進主体、である。経済発展を最優先する「トリクル・ダウン」方式ではなく「人間開発」という新しい目標を据え、「開発独裁」ではなく「エンパワーメント」原理によるボトムアップ推進の主体で実施する政策意図をここに認めることができるのである。

モンゴル国の経済状況は、市場経済移行のなかで順調な発展とは言い難い。重ねて、2年連続している寒波と干ばつによるゾド(災害)被害も厳しい。だが、私たちが地域に出かけてアイマク、ソムを訪ねると、着実な動きに出会う。発展の軌道にのったアイマク、ソムもあり、発展の軌道をつかめない厳しい地域もある。しかし、どんな遠隔地でもアイマク、ソムの地域発展計画作成への取り組みと推進への努力が始まっているのである。成功事例、不成功事例に分けてその実態を確かめることが今必要な研究課題であろう。終わりに一言、このアイマク、ソム地域発展計画の策定・推進では女性グループ、多数の教師、医者、技師など専門職女性の活躍がめざましいことを言い添えておきたい。

(日本福祉大学知多半島総合研究所客員研究員 島崎美代子・しまざきみよこ)